様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７３０６０６

研究課題名（和文）　デューイ教育思想の政治哲学的検討―共同体論的再解釈の可能性と課題の解明―

研究課題名（英文）　A Political Philosophical Study on John Dewey's Educational Thought: Focusing on Communitarian Interpretations

研究代表者
生澤　繁樹　（IZAWA SHIGEKI）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：70460623

研究成果の概要（和文）：ジョン・デューイの教育思想は，子どもの興味や関心を中心に据える進歩主義，経験主義，問題解決型の教育を説く理論や方法として広く参照されてきたが，その思想は，社会や政治に関する哲学と深い結びつきをもっている。本研究は，現代のコミュニタリアニズムによるデューイ再解釈の可能性と課題を考察することによって，こうしたデューイ教育思想の政治的含意を解明しようとするものである。この検討をとおして解明されるのは，政治と教育についてのデューイの考えがデモクラシー，社会正義，シティズンシップといった現代のさまざまな議論とどのように関連しているかということであり，デューイのデモクラシーの教育理論の重要性が明らかとなる。

研究成果の概要（英文）：John Dewey’s educational thought has been closely related to his social and political philosophy, although it has be widely known as the theory and method of progressive, experimental, problem-solved education centering on the interests and concerns children have. This study interprets the political implications in his educational thought by examining the possibility and difficulty of today’s communitarian re-readings of his works. Through such examination, this research program makes clear how his idea of politics and education connects with contemporary arguments on democracy, social justice, and citizenship, and it clarifies what is the significance of his democratic theory of education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：ジョン・デューイ，コミュニタリアニズム，教育思想，政治哲学，デモクラシー，リベラリズム，プラグマティズム

１．研究開始当初の背景

(1) 従来，わが国の戦後教育研究では，「政治」の介入や不当な支配からいかにして「教育」の独自の原理や固有な課題を追求するかということが長らく問われつづけてきたといわれている。すなわち「教育」には，「発達」や「成長」などの「政治」の論理とは区別された独自の，固有な論理がある。そこでは，「教育」の自律性を侵す「政治」の支配から保護する役目を教育研究は進んで担ってきたといってよい。本研究が検討の対象とするジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952）の教育思想もまた，『学校と社会』（*The School and Society*, 1899），『経験と教育』（*Experience and Education*, 1938）といった著作にみられる教育の方法や原理において通常知られ，何にもまして子どもの興味や関心を中心に据える進歩主義，経験主義，問題解決の学習を説く教育固有の思想として，あまりにもよく理解されすぎてきた。

(2) しかし今日，そのような研究の諸前提やデューイ読解の基本的な枠組みは，土台から大きく変容をせまられている。たとえば，子どもたちの市民性や政治的リテラシーをどのように涵養するか，社会の多元化やグローバル化のなかでどのように国家の教育権限と親の教育権限を政治的に確定していくのか，また，文化的・宗教的価値の多様化や多元化のなかで，教育の政治性を問いなおし，いかにして教育の公共性，共同性，私事性を再考していくのか。シティズンシップ，グローバリズム，マルチカルチュラリズムといった問題として，近年，教育研究のなかで再考されつつあるこれら一連の諸課題が示唆するのは，教育において「政治」の問題が改めて焦点化され，「政治」と「教育」とを再び接続するような研究がひとつの中心テーマとして模索されはじめたということである。

(3) 1990 年代以降，英米圏におけるデューイの哲学・思想研究は，デモクラシー，リベラリズム，プルーラリズムといった先の諸課題に理論的な説明を与える政治哲学・思想研究の学術的動向のなかで注目を集め，再評価の機運が盛り上がりを見せてきている。このうち優れた研究として挙げられているのは，ロバート・ウェストブルック（Robert B. Westbrook）の *John Dewey and American Democracy*（1991），アラン・ライアン（Alan Ryan）の *John Dewey and the High Tide of American Liberalism*（1995），スティーヴン・ロックフェラー（Steven C. Rockefeller）の *John Dewey: Religious Faith and Democratic Humanism*（1991）といった 90 年代の一連の研究成果である。こうしたデューイの政治哲学・思想に関する研究は，近年ではダニエル・サヴェッジ（Daniel M, Savage）の *John Dewey's Liberalism*（2002）やウィリアム・キャスパリー（William R. Caspary）の *Dewey on Democracy*（2000）をはじめ，より最近ではロバート・タリッセ（Robert B. Talisse）の *A Pragmatist Philosophy of Democracy*（2007）やメルヴィン・ロジャース（Melvin L. Rogers）による *The Undiscovered Dewey*（2009）など，デューイの哲学・思想を現代政治哲学の文脈から読みなおす試みが継続的に進められ，その成果も次第に蓄積されつつある。

(4) ところが，そうした成果があるにもかかわらず，教育哲学や教育思想の領域の研究において，これまで政治哲学という研究領域の蓄積や方法と突き合わせてジョン・デューイの教育思想を政治哲学的に吟味しようする試みはそれほど多くはなかった。ほとんどそれは，手つかずの作業であったというべきであろう。これは，わが国の研究動向だけでなく，英米圏の教育哲学・思想研究においてもいくらか事情は同様であるといえる。たとえば教育哲学者のハリー・ブリッグハウス（Harry Brighouse）が論じているように，現代の政治哲学・思想研究上の著作は，まずもって「教育」の問題について有益な考察を展開してこなかったといえるし，これとは反対に，それらの政治哲学上の知見もまた，これまで教育研究において充分に受容されてこなかった（Cf. Harry Birghouse, *Egalitarian Liberalism and Justice in Education*, Institute of Education, University of London, 2002）。そこでは，デモクラシーやリベラリズムを理解し，それを担う子どもたちの市民性や政治的リテラシーの「教育」についての考察が進展するどころか，「政治」と「教育」とをまともに結ぶ探究の方法が，双方の領域の研究において必要だと気づかれながらも，いまだ充分に検討されてこなかった。そこで本研究は，以上のような研究動向の隙間や余白を埋めるために，改めて「政治」という問題視角からデューイの教育思想を検討しなおそうとする着想のもとに計画され，進められたのである。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は，ジョン・デューイの教育思想を現代英米圏の政治哲学・政治思想研究の学術的動向のなかに位置づけなおし，

その今日的な意義と射程について再検討しようというものである。この研究では，とりわけ現代コミュニタリアニズムの政治哲学によるデューイの共同体論的再解釈の可能性とその課題を解明するという視角から研究の目的を遂行し，「教育」と「政治」の方法を結ぶ新たな研究領域を開拓しようと試みた。

(2) こうした目的を遂行するにあたり，本研究が着目していったのは，現代のコミュニタリアニズムと呼ばれる政治哲学の動向である。コミュニタリアニズムとは，1980年代にリベラリズムやリバタリアニズムを批判した政治哲学上の立場のことであり，共同体のなかで「自己の構成（the constitution of the self)」が規定され形成されるという共同体論的な人間観や市民の政治への参加を育む政治論・教育論を展開する思想として主に知られているものである。研究代表者は，これまでの研究において，このコミュニタリアニズムの政治哲学・思想がしばしばデューイの哲学・思想を積極的に引用したり，援用したりする点に関心を寄せ，検討を進めてきた。本研究でも，まずはその共同体論的再解釈の可能性と課題を解明するというアプローチから，「教育」と「政治」の考察を結ぶ方途とその問題点を探りたいと考えた。

(3) 研究期間内においては，とくにコミュニタリアニズムによるデューイの共同体論的再解釈が，デューイの政治哲学・思想だけでなく，その教育思想の射程をどの程度にまで受容し，言及できていたかという点を明らかにすることをねらいとした。デューイは，現代のコミュニタリアニズムの先駆けであると指摘する研究もあるが，この解釈の妥当性も研究期間の内に詳しく検証することとした。そしてこれらの検討をとおして，デューイの教育思想が政治哲学としてどのような理論的・実践的拡がりをもち，リベラリズム，リバタリアニズムといった，コミュニタリアニズムに対して批判的に接近する現代の政治理論の論争の周辺でどのように読みなおされ，またそれが今日の政治と教育をめぐる現実的な課題にどのような示唆を与えているのかを解明することがめざされた。

３．研究の方法

本研究は，平成 22 年度より 3 カ年計画で研究を進めていった。その視点と中心的な方法は，以下に述べるとおりである。

(1) まず第一の視点は，デューイをめぐる共同体論的な読解の可能性と諸問題を明らかにすることである。本研究では，コミュニタリアニズムによるデューイ共同体論的再解釈を精査することにより，その課題の解明を中心的に進めていった。具体的には，マイケル・サンデル（Michael J. Sandel)，アラスデア・マッキンタイア（Alasdair MacIntyre)，チャールズ・テイラー（Charles Taylor)，マイケル・ウォルツァー（Michael Walzer)，ロバート・ベラー（Robert N. Bellah)，ベンジャミン・バーバー（Benjamin R. Barber)，アミタイ・エツィオーニ（Amitai Etzioni）といった，哲学上ないし政治上のコミュニタリアニズムとして知られるさまざまな議論のなかにみられる人間の存在論的な主張とその教育学上の諸帰結の読解を試みながら，デューイのリベラリズムやコミュニタリアニズムのもつ射程と意義を含めて比較検討し，コミュニタリアニズムへと引きつけて読みなおすデューイの共同体論的な再解釈の意義と問題点を同時に明らかにしていった。

(2) 第二の視点は，以上の研究をとおして得られるデューイ教育思想の政治的含意が，現代の教育的課題をめぐる議論との関連でどのように読みなおされるかということを検討し，批判的に考察するということである。政治哲学や思想と関連する学術的動向，あるいはデューイの政治・社会倫理学に関する新たな研究動向も踏まえつつ，本研究では，とくにシティズンシップ教育，グローバル教育，多文化教育といった「政治」と「教育」との考察が重なる具体的な領域課題に照らして，デモクラシーや社会正義，シティズンシップの議論に対するデューイ教育思想の再評価を試みていった。この視点のなかでは，学校選択と価値多元社会，教育的関係，道徳教育論，学校改革論といった現代的な教育問題の地平から，近年の政治哲学・政治思想研究におけるデューイの共同体論的再解釈の意義を検討することも求められた。

以上のデューイ教育思想の共同体論的再解釈の可能性と課題の解明の作業をとおして，本研究は，デューイ教育思想の解読を行ない，発展的に文献研究を進めていった。研究の具体的な方法については，文献調査研究を主な方法としたが，期間ごとの目標に基づき，学会報告や中間評価，あるいは国内外の学外研究者との共同研究や交流などを行ないながら，研究計画の進捗状況を確認し，研究目的の達成を実行した。

４．研究成果

(1) 本研究の検討のなかで再び明らかとなったのは，リベラリズムとコミュニタリアニズムとをめぐる現代の政治哲学・政治思想史上の論争を理解するにあたって，ジョン・デューイの思想や哲学が積極的に再解釈され，ときに互いの立場によって引き裂かれているという事態があるということであった。それは，サンデル，ウォルツァー，ベラー，バ

ーバー，エツィオーニといったコミュニタリアニズムの理論家たちが，時折デューイの著作に好意的に接していたからというだけではなかった。よく知られたところでは，1990年代のデューイ再評価の旗手の一人であるアラン・ライアンの研究があるが，ライアンは，現代のコミュニタリアニズムによるリベラリズムの契約論的発想への批判とその共同体論的転回の動きを指して，デューイが70年前に主張したことの再出現であったと述べていた（Alan Ryan, *John Dewey and the High Tide of American Liberalism*, W. W. Norton&Company, 1995, p. 358)。

(2) 一方，かなり早い時期の考察としては，リチャード・ローティ（Richard Rorty)の独創的な解釈がそれとは異なる読解として取り上げられた。ローティは，自己を社会や共同体に埋め込むコミュニタリアニズムの一連の哲学的な自己理解とその正当化を不必要なものと捉えた上で，むしろジョン・ロールズ（John Rawls）の『正義論』(*A Theory of Justice*, 1971）やそこに再発見される政治的リベラリズムの方にこそ，哲学的な基礎づけを必要としないデューイのプラグマティズムとの共鳴を示す見方が隠されていると判断したのであった（Richard Rorty, “The Priority of Democracy to Philosophy (1988),” in Rorty, *Objectivity, Relativism, and Truth: Philosophical Papers*, vol.1, Cambridge University Press, 1991, pp. 175-196)。このような解釈に対しては，やや批判的な見解もあるが，いずれにしてもデューイはリベラルとコミュニタリアンの互いの立場の近さや遠さの受け取りにおいて，両義的に援用されつづけてきたということが浮き彫りとなった。

(3) 本研究でとくに検討されたのは，結局，リチャード・バーンスタイン（Richard J. Bernstein）が近年指摘しているように，思想史的な文脈を除外して読み込めばデューイの思想はリベラルとコミュニタリアンのいずれの陣営からも積極的に再解釈できてしまうということであった（Richard J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, Polity Press, 2011, p. 81)。さらに，こうした考察をとおして解明されたのは，リベラルとコミュニタリアンの論争において，「教育」の必要性や具体的な内実がそれほど明示的には吟味されず，検討事項の後景にさえ退けられていたということである。デューイの教育思想は，政治や社会の哲学・思想の文脈に置かれることでよりよく理解することができるであろうし，またその政治に対する示唆は教育の視座を除外して読むことは難しい。本研究が慎重に読み取っていったのは，デューイの思想と哲学が，リベラリズムとコミュニタリアニズムという論争上の立場のずれのみならず，「政治」(政治哲学・思想史）と「教育」（教育哲学・思想史）という考察枠組みのあいだの，いわば二重のずれが再び交わる場面において読み解かれ，立ち現れつづけるテクストであったということである。

(4) レイモンド・ボイスヴァート（Raymond D. Boisvert）の指摘によれば，これまでデューイ教育思想の念頭には，社会と人間の成長，すなわち政治理論と哲学的人間学という「二焦点的な（bi-focal)」特質があり，デューイは政治哲学と教育思想の問題を積極的に関連づけて考えていたと論じられることはあった（Raymond D. Boisvert, “John Dewey: An “Old-Fashioned” Reformer,” in Jim Garrison (ed.), *The New Scholarship on Dewey*, Kluwer Academic Publishers, 1995)。本研究では，現代政治哲学や思想におけるデューイ受容の可能性と課題に着目することで，「政治」と「教育」とを結ぶ研究領域の可能性と今日的課題の所在を解明していったが，そのことは同時に，デューイの教育思想が「政治」をめぐる問題にどのような示唆を提示し，どのような問題に直面したかという点を結果として浮き彫りにすることともなった。

(5)「政治」と「教育」とを結び合わせる新たな研究動向として知られる研究には，ガットマン（Amy Gutmann）の *Democratic Education*（1987）を代表的なものとして，カラン(Eamonn Callan)の *Creating Citizens*（1997)，ヌスバウム（Martha Nussbaum）の *Caltivating Humanity*（1998)，レヴィンソン（Meira Levinson）の *The Demands of Liberal Education*（1999)，マセド（Stephen Macedo）の *Diversity and Distrust*（1999)，ブリッグハウスの *School Choice and Social Justice*（2000)，カレン（Randall R. Curren）の *Aristotle on the Necessity of Public Education*（2001）などがあり，今日さまざまな角度から着目されているが，これらの諸研究ではデューイ教育思想が重点的に見なおされることはなく，本研究は，それを「政治」と「教育」との接続を念頭におく研究上の見落としであると考えた。本研究の成果の学術的な特色と独創性は，したがって，こうした近年の動向のなかにデューイの教育思想を置き，現代的に読みなおすことをとおして，「政治」と「教育」とを結ぶ研究領域の可能性と課題を解明する点にあった。

こうした見通しを踏まえて考察すれば，デューイ教育思想の政治哲学的検討は，「政治」や「経済」と切り離された「教育」固有の意味を見いだす作業として援用されてきたデューイ教育思想研究の弱点をも顕在化する。それは教育研究の「脱―政治化」の過程に再考せまる成果を生みだすものといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１６件）
① 藤井基貴・生澤繁樹，「防災道徳」の授業開発に関する実践的研究―「道徳教育」と「防災教育」をつなぐ授業理論と実践―，静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，査読無，第 21 号，2013 年 3 月，91-101 頁
② 生澤繁樹，学校を変える／社会を変革するデモクラシー―D. マイヤー学校改革論の社会哲学的考察―，上越教育大学研究紀要，査読無，第 32 巻，2013 年 2 月，13-24 頁
③ 生澤繁樹，アメリカ政治思想のなかのジョン・デューイ―井上弘貴著『ジョン・デューイとアメリカの責任』を読む―，政治哲学，査読無，第 13 号，2012 年 12 月，61-66 頁
④ 生澤繁樹，「契約」と「経験」の思想史―近代の社会的想像と共同性の創出―，近代教育フォーラム，査読有，第 21 号，2012 年 10 月，131-148 頁
⑤ 生澤繁樹，デューイの社会倫理学―1900-1901 年シカゴ大学講義録を中心に―，日本デューイ学会紀要，査読有，第 53 号，2012 年 10 月，173-185 頁
⑥ 生澤繁樹，教育はどのように問われるべきか―コメントと考察―，教育哲学研究，査読無，第 105 号，2012 年 5 月，58-62 頁
⑦ 生澤繁樹，図書紹介：苫野一徳著『どのような教育が「よい」教育か』，教育哲学研究，査読無，第 105 号，2012 年 5 月，212-215 頁
⑧ 藤井基貴・生澤繁樹，道徳教育の授業開発に関する実践的研究―郷土資料の開発とシティズンシップ教育の課題―，静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，査読無，第 20 号，2012 年 3 月，145-157 頁
⑨ 生澤繁樹，教育的関係の政治学―「自然＝本性」論の再考―，教育経営研究，査読無，第 17 号，2011 年 6 月，72-82 頁
⑩ 生澤繁樹，学校選択と価値多元社会―公教育の正当性の再構成へ―，教育哲学研究，査読無，第 103 号，2011 年 5 月，136-141 頁
⑪ 生澤繁樹，書評：上野正道著『学校の公共性と民主主義―デューイの美的経験論へ―』，教育哲学研究，査読無，第 102 号，2010 年 11 月，141-149 頁
⑫ 生澤繁樹，民主的な子どもの性向を育てる―デューイにおける家庭・学校・共同体のアポリア―，日本デューイ学会紀要，査読有，第 51 号，2010 年 10 月，147-161 頁
⑬ 室井麗子・生澤繁樹・矢田訓子，〈近代＝世俗化〉の物語を再考する―Ch. Taylor, *A Secular Age* (2007) をめぐって―，近代教育フォーラム，査読無，第 19 号，2010 年 9 月，147-158 頁
⑭ 生澤繁樹，書評：井上弘貴著『ジョン・デューイとアメリカの責任』（木鐸社，2008 年），イギリス理想主義研究年報，査読無，第 6 号，2010 年 7 月，49-53 頁
⑮ 生澤繁樹，コミュニタリアニズムの教育哲学―共同体に基礎をおく公共哲学と人間形成論の帰結―，教育哲学研究，査読無，第 101 号，2010 年 5 月，7-14 頁
⑯ 早川操・松下晴彦・生澤繁樹，デューイとの対話―デューイ的思索の過去・現在・未来―，教育哲学研究，査読無，第 101 号，2010 年 5 月，202-206 頁

〔学会発表〕（計１１件）
① 生澤繁樹，ジョン・デューイとグローバル化時代の「公衆」論―デモクラシーの政治・教育・倫理―，日本デューイ学会第 56 回研究大会・課題研究，2012 年 9 月 23 日，東洋大学
② 生澤繁樹，学校を変える／社会を変革するデモクラシー―リベラリズム・教養・学校選択―，日本カリキュラム学会第 23 回大会・課題研究，2012 年 7 月 7 日，中部大学
③ 生澤繁樹，アメリカ政治思想のなかのジョン・デューイ―井上弘貴著『ジョン・デューイとアメリカの責任』を読む―，現代政治思想研究部会，2012 年 6 月 9 日，早稲田大学
④ 生澤繁樹，デューイの社会倫理学―1900-1901 年シカゴ大学講義録を中心に―，日本デューイ学会第 55 回研究大会，2011 年 10 月 2 日，関西学院大学
⑤ 生澤繁樹，「契約」と「経験」の思想史―近代の社会的想像と共同性の創出―，教育思想史学会第 21 回大会・シンポジウム，2011 年 9 月 19 日，日本大学
⑥ 生澤繁樹，デューイと正義論―正義の「原理」から「方法」へ―，第 103 回公共哲学京都フォーラム，2011 年 6 月 12 日，神戸ポートピアホテル
⑦ IZAWA, Shigeki, The Role of Teaching Philosophy in the Teacher Training Education，就業力育成支援事業「哲学教育の役割」，2011 年 3 月 14 日，静岡大学
⑧ 生澤繁樹，学校選択と価値多元社会―公教育の正当性の再構成―，教育哲学会第 53 回大会・ラウンドテーブル，2010 年 10 月 17 日，中央大学
⑨ IZAWA, Shigeki, John Dewey's Democracy and Education: The Acceptance and Influence in Japan, 33rd Annual Global Studies Conference, October 8, 2010, University of Nebraska, Omaha, USA
⑩ 生澤繁樹，学校選択と価値多元社会―公教育の正当性を問うために―，教育哲学会特定課題研究助成プロジェクト公開検討会，2010 年 6 月 26 日，早稲田大学

⑪ 生澤繁樹，教育的関係の政治学―「自然＝本性」論の再考のために―，上越教育経営研究会 2010 年度研究報告会，2010 年 6 月 19 日，上越教育大学

〔図書〕（計 1 件）
① 日本デューイ学会編，世界思想社，日本のデューイ研究と 21 世紀の課題―日本デューイ学会設立 50 周年記念論集―， 2010 年 10 月，234 頁（生澤繁樹，デューイと現代の社会正義思想―「政治」と「教育」のプラグマティズムに向けて―，第一部第 5 章）

〔その他〕
ホームページ等
①上越教育大学ホームページ
http://www.official.jimu.juen.ac.jp/teacher/j_kyo_info.php?j_id=155
②兵庫教育大学連合学校教育学研究科ホームページ
http://www.office.hyogo-u.ac.jp/jgs/member/kyouin_data/IZAWA_S.html

６．研究組織
(1)研究代表者
生澤　繁樹　（IZAWA　SHIGEKI）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
准教授
研究者番号：70460623